

「日本の学童保育」に掲載されている大切な言葉

全国学童保育連絡協議会が発行する「日本の学童保育」より、私が大変参考になった言葉を抜粋させて頂きました。ここに記載した言葉以外にも、とても役立つ内容がたくさん記載されていますので、是非「日本の学童保育」を読んでみて下さい。

【2016年3月号】「子どもにとって遊びとは」より

- ・子どもは、遊びの中でじつに多くのことを学び、交友関係をつくり、癒され、明日への希望を育みます。
- ・子どもたちの遊びに関与したり指導したりするうえでの大前提は、子どもたちがなにを面白がって遊んでいるのかを共感的に理解する事です。

【2016年4月号】「お母さんは、多少ダメなくらいでちょうどいい」より

- ・祖母は、土地や財産を持っていても奪われたり失ったりする、と身をもって感じたらしく、知識と教育が一番荷物にならず、奪われもしない、と悟りました。
- ・「家事はみんなでするもの」で「お手伝い」ではないと思っています。子どもも家族なのだから、子どもにできることは「子どもの仕事」です。子どもたちは「米をとぎ」「風呂を洗い」「茶碗を洗って」います。ただし、「やってもらって当然」という態度は厳禁で、「ありがとう、助かるな～」と少し大げさにほめることも忘れてはなりません。

【2016年4月号】「心のお守りをあたためて」より

- ・学童保育は保護者の方々が安心して働きながら子育てができるように、そして、子どもの放課後などの生活が豊かでしあわせであるように、という願いから生まれました。
- ・学童保育には、不安やこまりごとも、安心して聞き合い、語り合い、祈るような思いで希望の糸を紡ぎ合うことを、何よりも大切にしてきた歴史があります。
- ・つらいことやせつないことがあっても、ここに帰れば大丈夫だと感じさせてくれる場の感覚は、人間のケアの育みを支援するために欠かせない環境です。

【2016年4月号】「子どものあらたな挑戦を応援し、支える」より

- ・子どもたちの発達的な特徴の一つに「自己形成視」があります。「自己形成視」とは、過去の自分と現在の自分をつなげて考え、「成長した自分」を実感できるようになることです。「これまでだって、頑張ったらできるようになった。だから、いまはできなくても、がんばればきっとできるようになる」という前向きな気持ちの高まりを生み出します。
- ・こどもの新たな挑戦を支えるには、①こどもの学びを支える、②こどもの仲間関係を支える、③こどもの自分への信頼感を支える、という三つの視点が大切です。
- ・今の社会は、「挑戦する」ことより「失敗しない」ことや「うまくやる」ことを、子ども

に求めることが多いように思います。ぐっとこらえて、子どもの「新しい挑戦」を応援し、そっと支えてあげることが大切です。

【2016年4月号】「学童保育ってどんな場所」より

・様々な気持ちや出来事を抱えて帰ってくる子どもたちが、遠慮せずに、自分を飾らずに、素の自分を出せるのが学童クラブです。

・子どもたちはイライラしたりハイテンションだったりします。でも学校ではふざけたりせず、真面目に頑張っているとのこと。また迎えに来た保護者の前では静かになる子どももいます。学童クラブには、学校などでの精一杯の緊張感から解放された子どもの姿があるのです。

・子どもの言動に「無意味なもの」などありません。必ずなにかの意味があるわけです。それを考えるためには「子どもの生活の姿をまるごとつかむ」努力をしなければなりません。

・共感子どもにとって「この人は分かってくれる、味方だ」という信頼の土台になります。

・「よい子、できる子、がんばる子競争」が広がる社会のなかで、どこにいても安心できない、居場所がないと感じる子どもの苦しさを知ることが大切です。

・なかなか謝れない子どもがいます。「どうせ許してもらえないだろう」と思っているのではないのでしょうか。「人を簡単には許せない自分がいる」と知っているからではないのでしょうか。競争と評価に取り巻かれ「失敗したら終わりだ、失敗できない」と身構えて暮らす日常の生み出した感情ではないのでしょうか。

【2016年5月号】「のびのびと生活していける力を」より

・その子の本当の願いを考えていくことが大切で、生活のなかのその子の言動を意味あるものと受け止め、読み解いていく努力が必要です。そのような努力のなかで、その子に寄り添って「その子が直面している問題」を考えることで、どのような援助をどのような工夫のもとに進めればよいかが浮かんできます。

【2016年6月号】「指導員がこどもの様子を保護者と伝えあうために」より

・友達とのトラブルを保護者は「いじめ」ととらえて不安を増大させることがあったり、保護者は宿題や勉強、習い事が気になっているが、指導員は遊びや友達と過ごすことを大切に考えたいなど、保護者と指導員の間で子どもの育ちのとらえ方に違いが見られる場合があります。

【2016年6月号】「学童保育指導員の成長、仕事の楽しさと魅力」より

・指導員が立てた計画の枠のなかに子どもを閉じ込めるものではありません。「生活をつくる」主体は子ども自身です。子どもが主体になるような援助が大切です。

・子どもにとっては、遊ぶことそのものが生活であり、遊ぶことのなかに、またその発展の

なかに「学び」があります。

【2016年7月号】「学童保育指導員の成長、記録すること、学びあうこと」より

- ・学童クラブは、保護者が安心して子どもを預け、働けることが大前提です。「クラブに行きたい」「楽しいよ」「いっぱい遊べるよ」「ただいま～って帰るおうちだよ」
- ・楽しい事はどんなんやろう、子ども中心に考えよう。子ども達にとことん遊びきる楽しさを知ってもらおう。
- ・「子どもはこうあるべき」「こうすべき」という考えが色濃くあります。この考えを「ベキネバ症候群」といいます。

【2016年10月号】「学童保育における生活、安心できて他者が感じられる生活」より

- ・学校から下校すると家庭での生活と自由な遊びが待っています。それに代わるものとして、学童保育においては、集団の中でどのような生活をつくり、遊びを保障するかが大切です。
- ・第一に、子どもたちの「健康」で「安全」な生活環境の整備にとりくまなければなりません。
- ・子どもたちに丁寧に伝えていくことが大切、大人が守るだけでなく、子どもたちが自分たちで気を付ける、自分で守る力を子どもたち自身に育てることが大切です。
- ・すべての子どもが安心して過ごせることが大切です。「物理的な安全性」や「静けさ」は欠かせません。カガがない、おちついて過ごせるなどが確保されなければなりません。
- ・心理的な安心感として、「保護されている」「見守られている」「自分の思いが出せる」「楽しさや喜びがある」「認められる」という実感が重要です。
- ・子ども自身が主体的に参加していっしょに生活を作っていくことが必要です。どのようなきまりや役割が必要かを相談したり、困ったことがあったらみんなで話し合っ解決したりすることで、安心感につながります。
- ・子どもたちの生活を、指導員から与えられるものではなく、自分たちで考えてより良いものにしていくことができる、「自分たちのもの」にしていくことが必要です。

【2016年11月号】「よりよいチームワークのために大切にしたいこと」より

- ・保護者との関係が悪くなるのは、①指導員から見てその保護者が「よい親でない」と見えるとき、②指導員と保護者の役割分担がスムーズにいかないとき、です。
- ・格差の拡大や価値観の変容が進行中の社会において、意見や価値観の食い違いは避けられないのだから、それを「なくすこと」だけを目標にするのではなく、むしろ、意見の食い違いがあったとしても、それを「不信感」や「対立」にしないことが重要です。
- ・具体的な活動の場面で、意見や行動の食い違いがあったとしても、相手にはそれなりの理由があるに違いないと考え、納得のいかないことがあってもその人の考えを真剣に聞いて

みようとすることが重要です。

・自分と異なる意見や考えのなかに、聞くべきものを聞こうとし、理解しようとする関係を信頼関係といい、自分とは意見や価値観を異にする他者のなかに、価値あるものを見出したときに、相手をリスペクトするというのでしょうか。

【2016年11月号】「学童保育における仲間関係づくりの大切さ」より

・つぎつぎに起こるトラブルや問題の発展に時間と手を取られて、その結果、指示・制止の多い保育に陥りやすくなっています。こうした保育のなかで、おちつかない、話が聞けない、おとなの気を引こうとする、友達にいじわるをするなどの行動がさらに発展し、それを抑えるためにいっそう指示や抑止が多くなるといった悪循環が生まれてしまいます。

・子ども同士の豊かな関係を育てるために重要なことは、「子どもの要求に応える生活やあそび内容の提供」です。だからこそ学童保育では、乳幼児期の「育ちそびれ」を取り戻しながら、豊かな人間関係を体験することのできる生活やあそびが大切です。

・仲の良い友達同士で好きなあそびに夢中になれる時間を保障することが必要であるとともに、学童保育の良さを生かして、異年齢のかかわりを体験できる生活やあそびも大切です。

・子ども同士の豊かな関係を築くうえで前提となるのが、学童保育全体の雰囲気づくりです。なによりも、ひとりひとりの思いが出せる集団をつくることから始めなければなりません。

・指導員が子どもの思いに耳をかたむけ、受け入れていくことが不可欠です。それと同時に、指導員や友達のことを受け入れること、協力できることだけを求めるのではなく、「拒否の自由」も尊重しながら、イヤなことをイヤと言える関係「イヤなこと」が理解できる力を育てることが重要です。

・「その言い方で、〇〇さんはどう感じるかな?」「ほかの言い方や伝え方はないかな?」などのことばを子どもにかけて、一緒に考えながら、「わかりあえて、互いが気持ちのよい」言い方や伝え方を子ども自身が、あるいは子ども同士で見つけ出していくことができるような働きかけが子どもの関係を育てるのです。

【2016年11月号】「ゆれながら、学童保育指導員として向きあう日々」より

・子どもたちが「学童保育に行きたくない、行くのがつらい」と感じていて、その理由が「あの指導員がいると、いやだ」ということだとしたら、子どもにとってこんなに苦しい、つらい、悲しいことはないでしょう。

・「指導員はトトロのような存在になってほしい」、「空気のような存在でありたい」と思います。なるべくめだたず、子どものそばにいても気づかれないような指導員、子どもたちに何か起きて困ったら見えてきて、そこにいることがわかる存在になりたいと思っています。

【2017年3月号】「こどもをまんやかに、共感しあい、語り合える関係を支えに」より

- ・ひとりひとりの児童に寄り添ったあたたかい対応
- ・現象だけでなくその背景を考える
- ・児童の気持ちへの共感を大切にする
- ・決まりは安全な生活をおくるうえでの合理性がある反面、こどもの気持ちにそぐわないこともある。このような時には、押し付けるのではなく「こどもの気持ちを知る材料である」ととらえる。決まりに対するこどもたちの気持ちを理解し、決まりを見直すことも必要。
- ・トラブルがあったら、トラブルをとがめるのではなく、なぜそうしてしまったのかを考える。
- ・こどもの気持ちを理解するためにはいろいろな努力をすることが大切。こどもに一生懸命関われば、気持ちは必ず伝わる。
- ・目の前のこどもたちを無条件で受け止め、「大好きだよ」と心の底から言えることが出発点。どんな子でも、私たちがその子を良く見さえすれば、その子の本当の姿が見えてきて大好きになれる。

【2017年3月号】「保護者との関係づくり」より

- ・学童保育は、こどもたちに豊かな放課後の生活を保障する場である。
- ・指導員は、相談相手が少なく、自分たちだけでがんばりがちな保護者を支える大切な存在。
- ・保護者は様々に悩みながら子育てをしている。
- ・困ったり、悩んだりしたときに相談相手がいない状態で子育てをしている人もいる。
- ・保護者を支援するとは、保護者の代わりなることではなく、養育力を発揮しやすくなるように支えること。
- ・時間的、精神的にゆとりがなく、こどもに厳しく接してしまう保護者は、ゆとりができることで接し方が少し変わるかもしれない。
- ・がんばっているけど子育てに自信がない保護者には、自信を回復することが大切。
- ・保護者との関係づくりには時間がかかること、「本当に話したいことは、話にくい」場合があることを前提に、指導員は、日常的な対話を大切にしながら、支援方向、内容、方針を考える必要がある。
- ・こどもの育ちつつある部分を伝えることが、育ちを共有することにつながる。
- ・意見がちがったときに「どちらが正しいか」ではなく「こどもためにはどちらが望ましいか」と考え話し合う。
- ・考えに違いがあったときは、意識のズレに目を向けることが大切。

【2017年3月号】「こどもたちが育ちあうことを大切に」より

- ・こどもは力がある、こどもは育つ
- ・大人はこどもが自らの力で育っていくこと支援していくことが大切。

- ・「放課後をどう過ごすか」をこどもたちが自分で考えられるように、いっせいに取り組みを行うような時間は設けていない。
- ・大人は、自分のことは自分でできるようにさせたくなりがちですが、失敗してもまわりに助けてもらいながら「やったらできる」を経験することは、「困っている人がいたら手伝ってあげる」「難しい事もみんなをやったらできる」という気持ちを育てる。
- ・こどもの権利条約は「こどもは自分の力で育つこと」を教えてくれるが、学童保育は「こどもはこどもの中で育ちあう」ことを教えてくれる。
- ・「仕事で疲れてやっと迎えにきたおうちのかたが、指導員からこどもの様子を聞いて、元気ができるように」と心掛ける。

【2017年5月号】「こどもを理解すること、学びつづけること」より

- ・その日の学童保育での生活のスタートの瞬間から、指導員は意識的にこどもの状況を把握し、理解することが求められる。
- ・言動や行動だけでなく、その背後にある一人ひとりのこどもの内面や生活背景を理解しようとするまなざしが重要である。
- ・ときにはこども達を受け止めながら守り、ときには新しい遊びの世界を共に創造し、ときにはこども同士がつながっていくことを後押しし、ときにはこども達が自分たちでなにかを成し遂げようとする瞬間を見守る。

【2017年8月号】「発達障害のあるこどもの理解と支援」より

- ・こどもを丸ごと見てみると、苦手や不得意なところだけでなく、たくさんの得意なところを見つけることができる。
- ・こどもの不得意を支えるはずの大人が、こどもの不得意をマイナスととらえる視点だけから見てしまうことは、とても残念です。
- ・新しい関係がこどもにとって厳しくなったとき、戻ってこられる基地がある。そのことが、こどもの心の支えになる。近くからの直接的な支援は、やがては遠方からの間接的な支援へと変わる。
- ・こどもへの説明は分かり易さが大切。「時間の分かり易さ」「空間（場所）の分かり易さ」「ことばのわかりやすさ」です。なにを、いつまで、どこで行うかを、具体的かつ簡潔なことばでこどもに伝えることが大切。
- ・こどもが自分の存在価値を認識して、「自分は自分のままで大丈夫」と思える気持ちを「自己肯定感」という。失敗経験や叱れる経験などが積み重なると「自己肯定感」は低くなる。
- ・失敗したとき、そこから「立ち直る力」をどうそだてるかが大切。「ドンマイ、次はがんばろう」「失敗したけど、ここまではうまくいったね」、そうした一言を自然にかけること、失敗はだれにでもある、そうした雰囲気を持った集団づくりが重要。

【2018年1月号】「子どもの自己理解の発達に大人ができること」より

・こどもは児童期（6歳から12歳頃）の間に自分への理解を深め、自分の内面的な特徴に気づくようになる。

・自分への理解の変化に伴って、児童期には自分への評価が変化する。

・小学生4年生になると、自分の悪いところのみを答える子どもが増える。

・多くの高学年の子どもたちが自分に対して肯定的にとらえていない現状が明らかになっている。年齢が上がるにつれて、「自分が好き」ではなく「自分のことは好きではない」といった見方に変わっていく子どもが増えていく。

・自己理解の発達に関しては、児童期は「自分が好き」ではなくなる変化が生じてくる時期。

・児童期の自己理解の変化には大きく2つのことが影響している。①こども自身の考える力の発達、すなわち人の比較の中で自分のことを客観的にとらえる力がついてくる。②大人や友達との関係性。低学年の頃は親や教師、指導員などの身近な大人から「大切に思われているかどうか」ということが自分の理解に大きく関わっている。中学年以降は「自分は仲間から必要とされているか」「仲間と同じか」ということが自分を理解するうえで大切になる。

・**児童期前半**ではこのこどもの自己理解は、外見のような表面的な側面に対する理解が多く、自分自身の変化に注意が向いている。過去の自分と現在の自分をつなげて考え、「成長した自分」を実感できるようになってくる。この**成長した自分を感じられる力を「自己形成視」と呼ぶ**。一方この時期のこどもは、大人が思う以上に大人の価値観に敏感である。身近な大人から愛されたい、認めてもらいたいという気持ちが強く、大人がほめてくれることを自分のすべきこととして一生懸命取り組む。したがって、**大人がひとつの価値観だけをよいものとして子どもたちに伝えていくと、その価値観に見合わない自分や他者を否定的にとらえ、成長した自分を実感する機会を失う**。この時期に重要なことは、①**多様な価値観を持つ活動を保障する**、②**ひとつの活動のなかにも複数の価値があることを大人が伝える**。「できる・できない」「勝った・負けた」といった一律的な価値観ではなく、活動の中にさまざまな価値があることを指導する。自由に選べる活動の幅があり、多様な価値を教えてくれる指導員がいることで、こどもは自然に自分の好きな活動をみつけ、そこに自分にやりがいや自分らしさを発見していく。

・**児童期後半**では、考える力が質的に変わる。それに伴い自分の行動や性格などを相手の視点から客観的にとらえることが可能になる。これを「**自己客観視**」と呼ぶ。自分の性格や行動特性などを客観的にとらえるようになり、自分に対する評価が否定的になり始める。人との関わりの点では、大人との関係よりも友達との関係に注意が向くようになる。「ギャングエイジ」という言葉に代表されるように、子どもたちは遊びを中心とした活動の中で強く結びついた仲間関係をつくりだす。仲間との関係性のなかで自分の存在を確認し、自分の価値観をつくりだしていく。この時期は、年齢の近い子どもたちで行う手応えのある自治的な活動と、異年齢集団のなかでの教え合いあいや助け合いができる多くの経験の両方を保障することが大切。

・こどもは年齢があがるにつれて自分の内面に注目するようになり、さらに客観的に自分をみつめることができるようになる。しかしそれは同時に、こどもが自分の「できなさ」に気づき、ときに自分が「好きではなくなる」時期に入ることを意味する。

・大人はこどもに自信を持ってもらいたいと思い「できるようになったこと」に着目し、そこをほめること、認めることがこどもの発達を援助することであると思いがちである。しかし、こどもたちの日常には、困難だと感じたり、悩んだり、自信を無くしたりする経験が多くある。ほめられてもそこにこども自身の実感が伴わなければ、よろこびや達成感は生まれにくいばかりか大人に対して不信感を持つようになる。

・児童期のこどもには、発達の途上で生じる揺れ動きやわからなさに向き合ってくれる大人の存在が重要である。

・こどものできなさに向き合って一緒に悩み考えていくことは、できるようになったことをほめたりみとめたりするよりも多くの時間と労力を必要とするが、それが指導員としての心構えである。

【2018年2月号】「小学生のこころのヒミツ」より

・乱暴なことばを口にするこどもに対して、多くの人は「叱り方」「説得の仕方」を考えるが、そうではなく、彼が乱暴な言葉を口にしないで済む、ワクワクする、心地よく過ごせる時間をどのようにつくるかということのほうが大事。

・大人はどうしても「この力を身に付けさせてあげたい」という思いが強くなりがちだが、一人ひとりの好きなこと、得意なことを大事しながら、さらになにを取り入れることができるとよりすてきになるのかを考えることが大切。

・小学生は自分の身体が大きく変わっていくことに向きあっていかなければならない時期である。本来は、こどもたちが自分の身体の変化をプラスに感じることのできるような教育も必要な時期。

・大人は「なんでうまくいかなかったかを考えてみよう」「なんでケンカしたのか考えてみよう」などと、反省することをせまりがち。すると「考えるのがつまらない」と思うようになる。「なんでうまくいったのかな」などと、楽しいことを考える機会が多くある方が、こどもたちも前向きになれる。

・おちつきがないのはいけないことではない。自分の力の向けどころが良く分からないうちは、むやみに動くので、落ち着きがないように見える。「これが本当に好きだ」というものを持ってくると、しだいに落ち着いて計画的になってくる。

・「なにかができたたり格好がいいから、かわいがられる」のではなく「駄目だったり、情けなかったりする自分も好きになってくれる人がいる」ことがこどもにとって大切。